

「 86水害から学んだこと 」

鹿児島県 南さつま市立坊津学園 8年 おおやま ことみ 大山 琴未

日本人に「8月6日は何の日」と聞くと、ほとんどの人が「広島に原子爆弾が投下された日」と答えるだろう。私も最近まではそうだった。だが、8月6日の当日、母に「今日は何の日でしょう。」と言うと、「86水害の日」と答えた。予想外の回答にとっても驚いた。父にも聞いてみたが、母と全く同じ答えだった。私は、86水害が昔鹿児島で起こったことは知っていた。でも、それが広島の前爆よりも鹿児島の人たちにとって印象深いことだったというのを感じた。きっと、鹿児島県民の人たちに母と父にしたような質問をすれば同じ答えが返ってくるかもしれないと考えた。一体86水害とはどんな災害だったのか、調べてみることにした。

86水害とは、1993年の8月6日に鹿児島市で起きた集中豪雨による水害のことだった。局地的な大雨により、川が氾濫したり、住宅の床が浸水したりした。そして、この水害で、死亡者、行方不明者を含めた合計49人が犠牲となってしまった。死亡者の主な死亡原因は、土砂崩れに遭ったことだった。実際に、竜ヶ水駅土石流事故というのが起きていた。列車が鹿児島駅方面に向かって走行していたが、土石流により線路が通行不可となり、引き返すこともできず立ち往生してしまった。この時に土石流の危険を感じた運転士は、乗客のいなかった車両に全員を避難させようとした。だが、その最中に構内を土石流が襲い、それによって海に流された3人が死亡してしまった。この事故だけでなく、土石流が住宅を直撃し、逃げ切れずに死亡したということもあった。86水害で特に被害が大きかった鹿児島市は、シラス台地が広がっている。シラス台地は、崖や斜面が多く、地盤が脆いため、豪雨によってがけ崩れや土石流が発生しやすい。そこから土砂災害も巻き起こしてしまっていた。これを知った時、大雨が続くような場合は、できるだけ山崖などを避けて活動したほうが良いと思った。また、私は、86水害が起こった8月6日、テレビでとあるドキュメンタリー番組を見た。そこでは、86水害の特集を行っていた。私は釘付けになって見ていた。見たこともないぐらいの大きな土砂が近くの住宅を襲っていた。この家に住んでいた人たちは無事だったのか心配になった。自分だったら、この状況で落ち着いてすばやく行動できていたのだろうかと考えながら見続けた。被害にあった住宅はどれも以前の形が全く分からないほど崩れていた。この番組を見て、私は、8月6日だけではなく、5月下旬からすでに豪雨による被害が多々あったことを初めて知った。そして、やはりどれも土砂崩れによって犠牲者が出ていたことに気づいた。土砂崩れも地震のようにいつ起きるか予測しにくい。ただ集中豪雨が起きている場合は、崩れる覚悟をしておかないといけないと思った。それではもしも豪雨で土砂崩れに巻き込まれる場所に住んでいたら、どうするのが一番最適なのだろうか。土砂崩れから身を守る方法は主に4つある。1つ目は、雨の状況を把握しておくことだ。大雨が続く時はテレビを付け、もしも自分の地域に警報や注意報が出ていたら即座に避難することが大切だ。2つ目は、地域の避難訓練に参加することだ。土砂崩れが起きた時を想定し、実際に行動を試せる良い機会になると思う。3つ目は、ハザードマップを家族と確認しておくことだ。危険なところや避難場所などを話し合い、あらかじめ理解しておくことで、生存率が高くなるかもしれない。4つ目は、もしも土砂崩れに直面してしまったら、流れてくる方角から直角の方向に逃げるとのことだ。土砂に背を向けて走ると、追いつかれてしまうため、方角を変えて逃げる必要がある。これらの4つを大事にして、これからは誰1人犠牲者を出さないようにしたい。

このように、豪雨になると、鹿児島は土砂崩れに遭いやすい地形になっている。そして土砂崩れは一回で多くの被害が出てしまう、恐ろしい災害だ。私達の手で土砂崩れを防止することはかなり難しい。32年前のようなことがもう起こらないように願っている。毎年毎年鹿児島で大雨が降り、最近も大雨注意報が出たりしていた。私は山の近くに住んでいるため、いつ自分が土砂崩れに巻き込まれるか分からない。そんな時に備えて、4つの大切なことを頭に入れて過ごしていきたいと思った。そして、テレビを見て学んだことを家族や友達に伝えてみんなで土砂災害から命を守れるようにしていきたい。